

第 34 回 浅井継悟さん (北海道教育大学)

日本心理学会若手の会コラムリレーでは、若手のみなさまに、ご活躍されている領域や普段の生活についてご紹介いただきます。

第 34 回目は、浅井継悟さん (北海道教育大学) にご執筆いただきました。

臨床と研究の間で・・・

博士論文は過剰適応をテーマに量的な研究をメインに書きました。一方で臨床実践ではブリーフセラピーという、原因を追求しないアプローチを用いています。このアプローチは、相手のコンテクスト (背景・文脈) を大切にすることも特徴です。私はブリーフセラピーの考え方を実践だけでなく、研究を行う上でも重宝しています。

学校に質問紙を依頼した経験のある方はこんなことをいわれたことはありませんか? 「項目数が多い」、「同じことを何回も聞いている」。必要なのと言って納得してもらおうこともあるのですが、断られることもあります。ですが、文科省が出している生徒指導提要を見ると、児童生徒理解の文脈で質問紙調査のことが書かれており、複数項目の必要性について書かれています。

同じことを言っても、「研究に必要」というのか、「児童生徒理解の役に立つ」というのかでは相手に伝わる意味合いも変わってくるのかもしれませんが。研究としても学校現場にとっても役に立つ研究を日々模索中です。

浅井継悟 (Keigo ASAI) さん

【ご所属】 北海道教育大学

【ご連絡先】 asai.keigo@k.hokkyodai.ac.jp

【ホームページ】 http://www.geocities.jp/asai_keigo/Keigos_web_site/Top.html

【その他】 猫と暮らして3年が経ちます。未だに触らせてくれません。朝は猫に起こされ、素早く寢床を明け渡します (人用の毛布に一匹で寝るのが好み)。時間になればスムーズにご飯をあげています。これは人間が条件づけをされているのでしょうか? それとも私が猫に過剰適応しているのでしょうか?